大手前大学論集　第11号（２０１０）１―26頁

漢文訓読とは何か―翻訳論と比較文化論の視点から[1]

川本皓嗣

要旨

いわゆる漢文、あるいはその日本における具体的な存在様式である漢文訓読は、考えれば考えるほどふしぎなものである。その曖昧さ、正体のつかみ難さという点と、それとは裏腹の存在の重さ、巨大さ、根深さという点で、それはまさに日本文化の特性を典型的に表わしているようだ。この重要な現象が、かなり最近まで十分な注意を惹くことがなかったのは、たとえば和歌や俳句などの特異な詩の形式と同様、それが日本人にはあまりにもなじみ深い、ごく「当たり前」の制度ないし決まりだったからだろう。とはいえ、ほぼ今世紀に入った頃から、訓読をめぐる議論がようやく活発になりつつある。これは大いに歓迎すべきことだが、ただ、訓読という現象に正面から理論的な考察を加えたものは、まだそれほど多くない（もっとも、俳句であれ連句であれ、掛詞であれ切れ字であれ、あえて理論的・原理的、比較論的な穿鑿の対象にしないことこそ、日本文化の特質なのかもしれない）。そこであらためて、あえてごく初歩的・常識的な要素をも考慮に入れながら、翻訳論と比較文化論の両面から、漢文訓読という異言語読解のシステムを問い直してみたい。

キーワード：漢文　音読・訓読・翻訳　原典＝源泉　音と意味　ゆらぎ

一

漢文訓読は、たんに、手早く容易に外国語を読み解くために工夫された便利な方法というだけではない。それは、訳文のなかに可能な限り原文の姿・形を残そうとする翻訳の特異な一形態として、つまり訳文の自然さや分かりやすさを犠牲にしてまで原文尊崇の態度をつらぬこうとする翻訳の極限的な一形態として、翻訳論上に興味深い問題を提供している。

また漢文訓読は、周縁文化が異質な中心文明を摂取することで得られる多大の利益とともに、そこから生じるさまざまな困難や混乱についても、多くの問題を示唆している。

近代以後、非ヨーロッパ圏諸国がヨーロッパ文明の圧倒的な影響下に入ったとき、そこから大きな恩恵を蒙る一方で、社会・文化のあらゆる局面に無数のひずみやずれ、矛盾や葛藤を抱え込んだ。それと同様に、あるいはそれ以上に、日本人による中国文明の大量受容は、日本の社会・文化のあらゆる局面に、不安定の要素――いかなる時にも自足的な安定を許さない、不断の「ゆらぎ」の状態をもたらした。ことに、漢文訓読を典型とする漢字・漢文摂取のありかたは、日本語という言語の根幹にかかわるだけに、そうした異文化接触の生み出す波紋の深さ、深刻さを典型的に示している。

この「ゆらぎ」はいまなお続いている。外来の漢字・漢文が隅々にまで浸透し、日本の「本来語」と分かちがたく共存している日本語という言語がある限り、この不安定な宙吊りの状態が解消することはないだろう。

二

まず、「漢文」とは何か。そんなことは分かりきっていると言えるだろうか。奇妙なことに日本では、同じ漢文の名のもとに、種類も性質もさまざまに異なるテクスト群を一まとめにしている――あるいは、意図的ないし無意識的に混同している。「漢文」という言い方自体、

「本家」の中国ではふつう一般には用いない呼び名である。中国で漢文といえば、

（一）漢時代の文、もちろん口語ではなく文言文（書記言語）

を意味する。また、中国でも清朝のように異民族が支配していた時代や、あるいは日本などの外国では、

（二）漢民族によって書かれた漢字による文言文

が「漢文」と呼ばれ[2]、ひいては、中国、韓国、ベトナム、日本など出所を問わず、

（三）漢字による文言文一般（主に中国の漢字だけで書かれ、中国の伝統的な文語の語順や語法にしたがうもの）

もそう呼ばれるようになった。この（三）が、日本ではもっとも一般的・標準的な意味での「漢文」であり、前近代東アジア諸国の共通書記言語と見ることができるものである。ここではそれを「古典漢文」と呼ぼう。むろん日常言語とは区別される書記言語だから、その具体的な発音のしかたは、中国でさえ時代や土地によってさまざまに異なっている。ところが日本では、さらにこの（三）とは別に、

（四）主として中国の漢字によるが、和製の漢字や漢語を交えたり、中国とは異なる日本的な文法や語法にしたがうもの（いわゆる「和化漢文」、あるいは「変体漢文」）

が発達し、さまざまな変種が生まれた。これらのすべてが時に応じて「漢文」と呼ばれるが、ここでは話を簡単にするため、（三）古典漢

文のみを扱うことにする。

だがそれで「漢文」の整理がついたかといえば、そうではなく、日本の漢文はもっと複雑で曖昧な要素をはらんでいる。漢文という名が実は何を含意しているか、それを探ること自体が、日本の漢文のふしぎな性質を明らかにすることにつながると言ってもいいだろう。

事実、日本で「漢文」と言えば、いま述べた（三）の漢文そのものを指すという一般的な了解がきちんと出来上がっているだろうか。そうでないことは明らかである。というのは、例えば高等学校の教科の一つに「漢文」があって、その教科書を見ると、漢文にいわゆる「訓点」が打ってある（大学入学試験などでは、学生の読解力を試すため、ときに訓点が省かれていることもあるが、本質的な違いはない）。そして奇妙なことに、日本では、こうして訓点を振った漢文をもあっさり「漢文」と呼んで、誰もそれを怪しまない。学生のなかには、漢文には初めから訓点が付いているものと思い込んでいる者さえ少なくない。

例えば、

亡南陽之害小不如得齊北之利大（史記　魯仲連鄒陽伝）

という漢文テクストは、教科書では、

（a）亡二南陽一之害小、不レ如下得二齊北一之利大上

のように、あるいは、

（b）亡ニ南陽ヲ一之害ノ小ナルハ、不レ如下得ニ齊北ヲ一之利ノ大ナルニ上

のように印刷されている。

もともと訓点は、「漢文訓読」を行うための補助手段として日本で発明・工夫されたものであり、中国人は、一部の専門家を除けば、ほとんどその存在さえ知らない。そうした訓点を伴う漢文は、もはや純然たる漢文とは言えず、「訓点つき漢文」と呼ぶのがより正確だろう。

そしてむろん、訓点を打つということは、ただもとの漢文テクストに些細な記号や文字の書き込みをする程度のことではない。例えば何か外国語のテクストを読んでいるとき、心覚えのために、語句の意味や文法知識などを欄外や行間に書き入れることがある。しかし訓点は、けっしてそのようなマイナーな付け足しではなく、いわば漢文テクストに根本的な変化を及ぼすための符号である。なぜなら、漢文訓読のさいには、テクストの個々の字句が日本語風に発音されるばかりでなく、文法や語法までがほぼ完全に中国語風から日本語風に移し変えられるからである。

訓点とは、漢文テクストを日本語で読み取るやり方を指示するために、原文の左右や隙間に記入する文字や符号である。訓点には時代によって、流派によってさまざまに異なる方式があるが、基本的には以下の二種類の記号から成っている。

まず、漢文では英語のように、述語が先で目的語が後にくるのに対し、日本語ではその逆になる。また漢文では否定辞「不」「非」などは副詞で、動詞の上にあるのに対し、日本語では否定辞「ず」などは助動詞で、動詞の下にくる。そこで漢文の字の前後に、日本語での読み順を示す記号を書き込まねばならない。これが「返読」のための「返り点」で、「レ点」や「一二三点」、「上中下点」などがある。

もっとも訓読のさい、ふつうの翻訳でよくあるように、原文の語順が自然な日本語の語順に変わりさえすれば、自由にどのような順で読んでもいい（たとえば「いつ窓が割れたんだ」「窓はいつ割れたのか」「窓が割れたのはいつだ」のように）というわけではない。できるだけ原文の形を尊重して、原文で上にある字はできる限り先に読み、下にある字をあとに回すという努力が払われる。

次に、漢文では日本語の助詞（「…は」「…を」）に当たる語が少ないので、訓読のさいにこれを読み加える必要がある。また漢文には、日本語のような動詞や形容詞・助動詞などの活用（「歩く」「歩け」、「早い」「早く」）がないので、いちいち活用語尾を読み添えなければならない。それを指示する文字が「送り仮名」である。（築島を参照）

亡二南陽一ヲ之害ノ小ナルハ、不レ如下得二齊北一ヲ之利ノ大上ナルニ

この文では、述語と目的語、否定辞と動詞の語順の違いに対応するために、「亡二南陽一」「不レ如」など、返り点が記入される。そのさい、助詞・助動詞などを読み添え、動詞・助動詞などの活用語尾を読み加えるために、「送り仮名」が補われる。こうして訓点を原文の周囲に記入することは、八世紀の終わりごろ、仏典を学ぶ奈良の僧侶たちによって始められ、のちその習慣が一般の漢籍にまで及んだ。

つまり、一見とるに足りない訓点の書き込みは、実は一言語から他の言語への根本的な転換を物語っているのである。訓点が振られたとたん、漢文テクストは、以前とまったく同じ字面（字とその配置）を保ちながら、異言語に正体を変えるのである。

だから、もとのままの漢文テクストと、訓点つき漢文テクスト（上記（a）と（b）二種類のどちらか）とをひっくるめて「漢文」と呼ぶことは、深刻な混同を犯していることになる。だが面白いのは、日本人は好んでこの混同を受け入れ、わざとうっかり思い違いをしているらしいことである。たんなる錯覚や事実誤認ではなく、どうやら「漢文」と「訓点つき漢文」が同じもの、あるいはほぼ同じで大きな違いはないものだと、ほとんど無意識に思い込もうとしているふしがある。印刷された字面を見れば、どちらにせよ、さして変わりはないではないか。字はすべて同じ、字の配置もすべて同じなのだから。

というわけで、先に挙げた四種類の「漢文」のほかに、もう一つ、

（五）古典漢文に日本式の訓点を施したもの（訓点には（a）返り点だけのものと、（b）送り仮名をも加えたものの二種がある）

という新種を加える必要がある。

そしてここまでくれば、さらにもう一種の「漢文」があることが、ただちに理解されるだろう。訓点にしたがって漢文を「訓読」するということは、すでに述べたように、中国語のテクストをただちに日本語テクストに置き換えることである。この日本語テクストは、場合によって三つの形をとることができる。すなわち声に出して読まれるか、声を出さずに心中で読まれるか、それとも日本語の文字に書き留め

られるかであって、いずれも日本語テクストとしては同じものである（書き留めるとき、漢字と仮名の使いかたに多少のずれが出ることはあるが）。

だから、もし訓点つきの漢文テクストを「漢文」と呼ぶのならば、

（六）古典漢文を、訓点にしたがって（あるいは、あたかも訓点が打たれているかのように）読み（書き）下したもの

すなわち、いわゆる「訓読文」「書き下し文」もまた、同様に「漢文」と呼ばれる資格がある。

南陽を亡ふの害の小なるは、齊北を得るの利の大なるに如かず。

このテクストは、声や文字の形で実現されるされないにかかわらず、すでに訓点つき漢文テクストに内蔵され、訓点によって指示された読み方だからである。

実際、日本語の文章のなかで漢文や漢詩が引用されるとき、これは訓読文だといちいち断ることなしに、書き下し文だけが掲出されることがある。読者のほうは、ごく自然にそれを「漢文」として受け取っているようだ。

三

こうして日本では、（三）の古典漢文だけに話を限ってさえ、（三）（五）（六）という三種類の異なったタイプのテクストが、十把一絡げに「漢文」と呼び習わされていることになる。見たところ、（三）は中国語、（六）は日本語であるのは明らかである。その（六）が無頓着に「漢文」と呼ばれることの奇妙さは、もっと注目されていいだろう。そして（五）の場合は、これを何語と見ればいいのだろうか。見た

目には中国語、読まれるときには日本語、そのどちらでもあり、どちらでもないという得体（えたい）の知れない存在である。

そうだとすると、ここでもっと重要な問題が浮上する。（六）は日本語だから、明らかに漢文テクストを「翻訳」したものである。では、（五）の訓点つき漢文テクストも翻訳なのだろうか。漢文訓読は翻訳だとよく言われるが、この奇妙なテクスト、あるいはそこに含意されている奇妙な置き換え作業を、ひと言で翻訳と呼んでしまっていいのだろうか。

英語の文を例にとって考えてみよう。

We went swimming in the pool yesterday.

この文を「私たちはきのうプールへ泳ぎに行った」という日本語文に転換することを、翻訳という。一方、この英語文に、漢文と同様の（だがより単純な）訓点を振ってみる。

We went$_5$ swimming$_4$ in$_3$ the pool$_2$ yesterday$_1$.

この英語文を、訓点による語順の指示にしたがって、

私たちはきのうプールへ泳ぎに行った。

と日本語で「読む」こと、それが訓読である。この場合、ほとんどの語は訓読（和訳）され、ただ“pool”だけが音読される。「プール」という英語は、すでに訛音を伴った形で日本語に定着しているからである。“the”はさしずめ「矣」のような不読文字と見ていいだろうか。あるいは訓読では、原文に少しでも近づくため、不自然でもわざわざ「その」と読まれるかもしれない。

さきの（a）と（b）二種類の訓点つき漢文テクストを翻訳と呼ぶことは、右の二番目の訓点つき英語テクストを翻訳と呼ぶことに等しい。そう呼ぶことは一見、まったく馬鹿げているように思われるが、本当にそうだろうか。このテクストは見たところ、まぎれもない英語だが、すでにそれを日本語に変換するための訓点が打たれている以上、このテクストは読む者に対して、ほぼ翻訳に等しい作業をすることを期待し、そのやり方を指示しているのではないか。たとえ声に出さなくても、心のなかでもそのように読まれるとすれば、これは歴然たる翻訳である。

もっとも漢文に用いられる字そのものが、日本人にとって、英語の字や綴りよりも、はるかになじみ深いので、その分だけ、作業が容易になるのは当然だろう。日本人は中国から漢字をもらい、そもそも字というもの自体をもらったため、多くの漢語や漢語的な発想・表現が日本語に深く根付いている。だから人にもよるが、漢文テクストを一目見ただけで、きちんと正確には読めなくてもある程度、書かれたことの見当をつけることができるだろう。とはいえ、漢文訓読の作業の性質そのものは、英語の訓読と本質的には変わらない。ここでも同様に、翻訳のための指示記号が記されており、現に読まれるときには中国語ではなく日本語で読まれる。だから、訓点つき漢文テクストもやはり、翻訳の一形態と見てもよさそうに思われる。

ただ、この両者をよく見比べてみると、ふだんあまり意識されることのない大きな違いが二つあり、その点が漢文訓読を、翻訳としてはほとんど例のない性格のものにしていることに気がつく。

第一に、英語テクストを対象とする場合には、声に出すにせよ出さないにせよ、いったん英語風に発音するという段階を経るのがふつうなのに、訓点つき漢文は、お経などごく一部の例外を除いて、一度も中国語風に「字音」で読まれることがない。原音どおりの「音読」という段階が完全に素通りされるのである。これについてはあとで触れる。

そして第二に、こちらの方がずっと重要だが、訓点つき英語テクストの場合、それがいったん訓読されたあとは、もとのテクスト自体にはたいてい用はない。ふつうの翻訳ならば、訳文が出来上がってしまえば、原文は消えてしまっても一向に構わない。むしろその方が望ましいと言っていいだろう。一般に翻訳は、起点言語（source language）による原文を、できるだけ自然で読みやすい目標言語（target language）に移し変えることをめざす。したがって、訳文のなかに原文の痕跡が残ることはめったにない。ゲーテの小説の中国語訳は、まる

で初めから中国語で書かれた小説であるかのように見えるのが理想だろう。そこには人名や地名など以外、もとのドイツ語が入り込む余地はほとんどない。

ところが漢文訓読の場合は、実質的には日本語への翻訳でありながら、もとのテクストが目の前から消え去ることはけっしてない。訓読つきのテクストには、もとのテクストがそっくりそのまま、一字一句も変えられず、動かされずに残っている。そして漢文訓読は、先に触れたように、漢文テクストの字句はおろか、その語順をさえ、できるだけ訓読テクストの中に保存しようとする。そして英語テクストの翻訳とは違って、漢文訓読では、そのことが何より重い意味をもつのである。

漢文では、訓点つきであれ訓点抜きであれ、原文が目の前にあること、そのままの形で目に見えていることが、ほぼ不可欠の条件である。もちろん近代に入って漢文の威勢がにわかに衰えてから、そして明治以後の学問普及によるめざましい漢文隆盛の時代が終わってからは、必ずしもじかに原典に触れたいという欲求を感じない読者が増えたのは事実である。ことに聖典視される古典以外の散文、なかでも訓読にはなじまない白話の作品などは、スペースの制約や、いちいち原文を参照する困難や煩わしさなどの理由から、もとのテクスト抜きの翻訳という形で出版されることが多くなった。とはいえ今日でも、極め付きの古典である『論語』や『荘子』はもちろん、人によっては『史記』でさえ、原文抜きの翻訳を読むだけでは安心できないという向きが多いだろう。そして詩の場合には、ある意味では当然のことながら、そうした傾向がとりわけ強く表れるのは言うまでもない。

例えば一般読者向けの漢詩・漢文の案内書や読本を思い出してみよう。そこにはまず、大きな活字で堂々と漢文テクストが掲げられ（すでに訓点のついたものと、訓点なしのものがある）、その下あたりに訓読文、そのあとに難解な語句の語釈と、現代日本語への翻訳（いわゆる「解釈」）が添えられるのがふつうである。原文抜きの漢詩集が想像できるだろうか（平凡社の「中国古典文学大系」は、散文はもちろん詩集や詞集でも、現代日本語訳を主役に立てるという点で、画期的だった。それでもその後に、やや小さめの活字で然るべく原詩が提示されている（訓点なし）。もちろん、漢詩が英語やフランス語に訳される場合には、主として中国で出版される対訳版などを除けば、原詩は省略されるのが一般である）。原典あっての訓読であって、けっしてその逆ではない。もちろんそうした案内書や読本のように、それらの要素のすべてが表面化され、ページ上に印刷されている必要はないが、潜在的にはそのどれ一つが欠けても、漢文は成り立たない。

もっとも、先に触れたように、たんなる引用などでは書き下し文だけが掲げられて、もとの漢文テクストが省略されていることがある。だが、そのときの頼りない気分、本物に触れていないという心もとない気分を想起してほしい。まして、漢詩が掛け値なしにただ翻訳され、現代の日本語に訳されものを読むときはどうだろう。それにはそれなりの読みやすさ、行き届いた理解のしやすさという利点はある。だが多くの読者は、一度は原文を見ないと本当に読んだ気がしない、形がぴたりと決まらないという感を抱くのではなかろうか。

漢文訓読では、原文がいつまでも目の前にある。もとの漢文は、日本語による読み取りが行なわれているときも、日本語で理解されたあとでも、動かしがたいオリジナル（「原本」「原典」でもあり、「起源」「源泉」でもある）として、そのままの形でつねに権威を発揮し、存在を誇示する。それが日本語でどのように読み取られようとも、あくまで原文こそが「本物」であり、訓読はたんなる理解への方便にすぎない。

そして、だからこそ日本では、逆説的にも、（三）漢文テクストばかりでなく、余計な字や記号が書き込まれた、それどころか言語さえ異なるテクスト—訓点つきテクストや訓読文—までをも、一くくりにひっくるめて「漢文」と呼んできたのである。なぜならあとの二つは、けっしてもとの漢文そのものではないが、ほぼ忠実にそれを日本語で再現し、その姿を写そうとするものだからである。それらは古典漢文、「本場」中国の純正な漢文の威光を背負い、その光を曲がりなりにもほぼ直接的に伝えようとするものである。

先に述べたように、ふつうの翻訳では、ある言語のテクストが、まったく別の言語のテクストにまるごと移し変えられる。ところが漢文訓読では、もとのテクストがそのままの形で厳然と目の前にあり、日本語での読み取りに強い拘束を加えている。その結果として生み出される訓読テクストは、日本語としてはかなり不自然で、直訳体のもつぎこちなさや分かりにくさ、ときには誤解の種さえ含まざるを得ない。とはいえ、だからこそ、訓読文はその分だけ中国語の原文に近いという印象を与えるのである。これはかなり危険なことでもあって、小倉芳彦は次のように警告している。

ここでさしあたって言いたいのは、訓読で読んだとしても、それで読めたことにはならぬ、ということである。訓読調の日本古文の調子のよさ、歯切れのよさに酔ってしまってはいけない。むしろ、そういう日本調にまきこまれることを、たえず警戒しつづける必要がある

ということだ。訓読法が、原文から離れた日本調に転移していることに無自覚では困る。なぜ困るか。それは、日本と中国との「文化」の差を忘れさせてしまうからだ。（小倉　一九）

訓読のさい、できるだけ原テクストの語句や語順をそのまま残そうとする（出来得る限り語順を変えず、上の字から先に読もうとする）のも、原典への深い敬意の表われである。古田島洋介によれば、訓読でこれほど原文の字や語順にこだわるのは、書き下し文から、いつでももとの漢文が復元（復文）できるようにという配慮からだという（古田島）。譬えて言えば、これはいつでも金と交換できる兌換紙幣のようなものではないか。

訓点つき漢文テクストも書き下し文も、その実体は、日本語による漢文テクストの不完全な複製に過ぎない。だが、つねに権威ある原文の傍に据え置かれるおかげで、そのオーラの幾分かを身に浴びる。それどころか、漢文を中国風に発音することを忘れてしまった日本では、そうして訓読される「漢文」こそが、ほぼ原典そのものに等しいと見なされてきた。日本の孔子や孟子は、中国語ではなく、「子いわく」あるいは「子のたまはく」といった訓読体の日本語でしゃべるのである。

四

ここで注意すべき点が二つある。一つは、先に触れたように、こうして書き込まれた訓点は、せいぜい初心者向け、あるいは心覚えのための補助手段にすぎないことである。漢文訓読の方法に習熟してしまえば、いちいち原文に訓点を記入する必要はなく、漢文テクストを見ただけで、すらすらと日本語流に訓読することができる。テクストの本体は、あくまで目に見える漢文の原文であり、それを読み解くさいの日本語テクスト（訓読文）は、実体としての漢文の上に便宜的、一時的に重ねられた「かりそめの」二次的テクストにすぎない。

かりに訓読文が翻訳の一種だとしても、ふつうの翻訳にくらべて、ここでは原文と翻訳の比重がまったく逆転していると言ってよい。翻訳でありながら、原文のほうがはるかに重いのである。

第二に、原文が本質化され、神聖視されるのに対し、訓読がたんなる理解の手段とみなされるため、日本語の訓読文は、いつまでも一個のテクストとしての自律性、自己充足性をもつことができず、いわば原文の影のような地位にとどまることである。これほど原文に依存し従属している訳文を、簡単に翻訳と呼ぶことができるだろうか。

しかもそのせいで、漢文訓読のしかたや、その結果としての訓読文は、さまざまな訓読の可能性、さまざまな読みかたのあいだを便宜的に揺れ動き、けっして固定されることがない。例えばさっき引いた文で、「小なる」を「小さき」、「大なる」を「大いなる」と訓読することも、不可能ではない。同じ漢文訓読でも、平安時代のそれと、江戸時代のそれとでは大きな開きがあることは、周知の事実である。動かない実体としての漢文の前で、仮象としての日本語訓読文は、いつまでも不安定に揺らぎ続けるのである。

漢文訓読というものが、翻訳としてのみならず、たんなるテクストの「読み」の手続きとしても、いかに風変わりであるか、その点を見定めるために、もう一度さきに挙げた漢文テクストがどのように読み取られるか、より詳しく観察してみよう。

訓読のさいには、漢文テクストの文字表記だけが、原文どおりまったく手付かずのままで残され、中国語としての原音（どんな形であれ）は完全に無視される。つまり、テクストの記号表現（シニフィアン）のうち、聴覚的イメージ（音声）の方は素通りされて、文字だけがただちに記号内容（シニフィエ）に直結する、つまりその意味が了解されるかのように見える。

亡二南陽一之害小、不レ如レ得二齊北一之利大上

だが、本当にそうなのか。そのような事態が現実にあり得るだろうか。周知のように、言葉は音と意味との組み合わせであり、文字はその音を書き留めるための二次的記号にすぎない。文字が音を飛ばして直接、意味に結びつくことはない。もっとも、「それは、表音文字のアルファベットを用いる言語圏の考え方であり、表意文字である日本などの漢字文化圏では違うのではないか」という見方が、一部にはあるようだ。漢字圏の人間は、字から直接、意味を読み取っているのではないか。だが、それはたんなる錯覚であって、言葉では「文字より音声のほうが基本」である。なぜなら「話すことができても読み書きができない人」はいくらもいて、今でも「地球上には文字をもたない

社会（無文字社会）がある」からだ。人類は数十万年前から言葉を話すようになったのに、文字を用いるようになったのは「最近」のことにすぎない。「子どもが言葉を覚えるときも、まず最初に話すようになってから、次に読み書きができるようになる」ではないか。「〔文字という〕図を音に変換することではじめて、その図は言葉になる」（月本　一四―一六）のである。

文字からじかに意味が了解されることがあり得ないとすれば、漢文訓読ではいったい何が起こっているのだろうか。中国語の原音は、もちろん初めから度外視されている。それならば、見たところ、答えはただ一つしかないように思われる。つまり、訓読のさい漢文テクストは、まず即座に日本語の音で読まれる―より正確に言えば、即座に日本語の聴覚的イメージ（音声）に移されるのだ。言い換えれば、漢文訓読では、漢文テクストの（一）記号表現のうち、（a）文字表記は中国語（文言文）、（b）聴覚イメージは日本語、そしてその聴覚イメージから（二）日本語の記号内容が読み取られるというわけだ。

もしそうだとすると、ここでは世にも奇妙な操作が行われているかのようだ。ふつう一般の翻訳であれば、（記号表現と記号内容から成る）中国語の記号（テクスト）が、（記号表現と記号内容から成る）日本語の記号（テクスト）に、まるごと移し変えられる。ところが、漢文訓読という特殊な作業においては、漢文テクストという中国語の記号表現の内部で、（一a）中国語の文字表記が、ただちに（一b）日本語の聴覚イメージに転換され、そこから（二）日本語の記号内容が了解されるように見える。つまり、ここでは記号表現のレベルで、文字から音へ、中国語から日本語への即時の切り替え、ないしすり替えが行われるのではないか。

とはいえ実際には、そのように法外な言葉の読み取り方は、あり得ない。中国語の字形から日本語の語音へ、二言語にまたがる字から音への短絡が、成立するはずがない。ただ、まるでそうとしか思えないところが、漢文訓読のユニークさ、ふしぎさの所以である。

実は、漢文訓読の場合にだけ、そういう妙なことが起こるように見えるのは、そもそも漢文テクストがあくまで中国語そのものだと頭から決め付けるからだ。先に述べた「文字表記は中国語（文言文）」という前提自体が、どうやら間違っているらしい。よく観察してみると、実際には「訓読」という作業が始まったとたん、漢文テクストは、初めから文字単位、フレーズ（句）単位、文（センテンス）単位で、（特殊な語法と表記法に従う）日本語として認知され、だからこそ、まず日本語の音（音読みであれ、訓読みであれ）で読まれ、次にその音から意味が了解されるのだ。つまり、中国語である漢文の個々の字形から直接、意味を読み取っているように感じるのは錯覚で、実は

個々の字（ひいては漢文テクスト全体）が、初めから日本語として認識され、その字形がただちに日本語の音と結びつき、そこから意味が読み取られるというのが、実際の順序である。訓読という姿勢で臨んだその瞬間、目の前の中国語テクストが、ただの一字も動くことなく、たちまち日本語のテクストに変身するというわけだ。上記の（五）訓点つき漢文は言うまでもなく、（三）（訓点なしの）古典漢文でさえ、訓読の対象とされる限り、その事情に変わりはない。外国語テクストを原音抜きで読むとは、つまるところ、その言語の外国語性を骨抜きにすることなのだ。古典漢文が中国語であり続けるのは、たとえば韓国で行われてきたように、それが中国語式に音読される場合のみである。

だがそれにしても、外国語で書かれたテクストを、そのままるごと日本語として扱い、日本語として読み取っていくこと—これもやはり、まことに奇妙なこと、他に類を見ないふしぎな手続きである。なぜ日本ではこのように意想外の離れ業が案出され、一千年以上の長きにわたって実践されてきたのか、そもそもなぜそんなことが可能だったのか。それは他でもない、日本人は文字というもの自体を中国から学んだから、漢字・漢文の移入とともに圧倒的な中国文明に接し、それを全力で摂取してきたから、そしてその結果、大量の漢字や漢語が日本語のなかに定着し、わが物のように馴染まれてきたから—つまり、漢文テクストを即座に日本語テクストと「読み違える」ほどに、漢字と漢文に習熟したからである。逆に言えば、江戸中期あたりから中国に対する自意識が徐々に膨らんでくるまで、日本人には、漢文テクストが外国語だというはっきりした認識があったかどうかさえ、疑わしい。日本人は漢文テクストを学ぶとき、普遍的な人類の叡智を学んでいるつもりでいた。だからその意味で、いわばエディプス期以前の幼児のように、自他の区別さえついていなかったとさえ言えるかもしれない。

南陽を亡ふの害の小なるは、齊北を得るの利の大なるに如かず。

このとき、個々の字句を音読するか訓読するかの判断は、もっぱら日本語側の便宜による。すべてを訓読する（日本語で読む）ことができるならば、それに越したことはない。だが、「南陽」「齊北」といった中国の固有名や、「害」のように日本語として一般化した漢語、さ

らには「小」「大」のように、音・訓どちらでもよいが、漢文の語調を残すために選ばれた語が、音読される。こうした字句の音読・訓読の別は、あくまで日本語内部の問題である。というのは、音読されるのは、音読しても日本語として不自然でない語句だけに限られるからであり、「小なる」であれ「小さき」であれ、どちらも日本語であることに変わりはない。

訓点つき漢文は、それ自体、このように複雑で曖昧きわまりない作業を内蔵している。言うまでもなく、訓点がつかない漢文も、たんに記号が実際に書き込まれないというだけで、大方はこのような手順を踏んで読み取られるのである。

五

そこであらためて、より広い翻訳論の角度から、漢文訓読をふつうの翻訳とくらべてみよう。漢文訓読のやり方には、時代によってさまざまな変化が見られる。むろん、漢文が日本に導入された当初には、ちょうど今日、学校の英語授業に見られるような順序が踏まれていたに違いない。

まず（1）できるだけ原語の発音どおりにテクストを「発音」し、（2）文法や辞書や文化的・歴史的背景の知識を活用してテクストに「解釈」を施し、最終的には（3）テクストの意味を自然な自国語に「翻訳」するという手順である。どう見ても、これが外国語のテクストを読むさいの、ごく一般的な手続きであろう（もちろん、原文を原文のままですらすらと読み、じかに理解できるようになれば、こうした三段階の手順は不要になるが、少なくとも平安時代以後の日本では、そうした実力の持ち主はきわめて稀だった）。

ところが日本における漢文テクストの読解については、ふつう一般の外国語の読み方とは異なった、まことに奇妙な点が二つある。すなわち、第一には、すでに述べたように、テクストをできるだけ原音どおりに発音するという（1）の基本的な過程がほぼ度外視されてきたことであり、第二には、あとで触れるように、（3）の「翻訳」の手続きさえ不要視されてきたことである。

まず第一の「漢文音読」過程の省略について見よう。日本では、古くは漢籍を音読する習慣があったらしいが、後世になると、ごく一部の書以外には行われなくなった。ただ、仏教の経典を音読する慣わしは、今日でもさかんである。逆に韓国では、個々の漢字もテクストも

音読されるのが常で、日本の訓読のようなやり方は、あまり普及しなかった。

日本で音読への意識が後世までかろうじて残っていたことを示すのは、いわゆる「文選読み」の存在である。「文選読み」とは、たとえば「経営トイトナム」「織女ノタナハタ」のように、ある語をまず漢語として音読してから、同じ語を今度は和語として訓読みし、両者のあいだを「ト」や「ノ」でつなぐ読み方である。古くから、ことに詩文集『文選』に多く用いられてきたため、この名がある（柏谷　三四九―三五〇）。

言うまでもなく、ことばの音やリズムは詩文、ことに詩の生命である。漢詩はもちろん、英語やフランス語の詩を考えてみても、音声面やリズム面への注意がどれほど重要であるかは明らかだろう。

古代の日本では、中国文化の旺盛な導入・模倣の流れの中で、早くも奈良時代には、漢文や漢詩の鑑賞や創作が、上流人士、ことに天皇・貴族や高級官僚の基本的な素養になっていた。漢詩を作ることは、宮廷などでの遊宴や社交に必須のたしなみだった。ところが、それらの漢詩を読むときに、原音による漢語の朗読・朗誦のたくみさ、発音の正確さが問われることはあまりなく、おおむね「漢文訓読」という形で事がすまされていたらしい。

しかも、なおふしぎなのは、そうして漢文はもちろん、漢詩をさえ日本語風に読んでいたにもかかわらず、日本人が漢詩を創作するときには、漢詩の韻律（音数、平仄、脚韻）や音声上の効果（畳韻、双声その他）など、漢詩の作法や約束を、すべて厳密に守っていたことである。

それらは中国風に発音したときに初めて具体化し、効果を発揮するものであって、日本語風に訓読する限り、誰にも直接的に知覚することのできないリズム上・音声上の特徴である。だから日本で漢詩を作る者は、自分の耳には聞き取れない詩句の平仄や脚韻を正しく整えようとして、いちいち辞書で調べ、涙ぐましい努力でそれらを覚え込み、きわめて人工的に、まるで細工物のように、詩を組み上げて行ったのである。

それでは、日本の詩人たちは、もとの「正しい」発音さえわからず、リズムや音声の本当の効果を味わうことさえできない漢詩を、なぜせっせと作り続けていたのだろうか。それは、たとえ実際の発音のしかたは違っても（どう発音していいかさえ、よくわからなくても）、

形の上ではどこでも、ことに中国でも、立派に通用するような「本物」の漢詩を作りたかったからである。「本場」の中国人に見られても恥ずかしくない詩を書くこと、それがかれらの願いであり、誇りでもあった。

とは言うものの、よく考えてみれば、これは音声面をまったく無視して、文字の上でだけ、書記言語（エクリチュール）としてだけ、完璧を期したということではない。なぜならこうした漢詩は、日本で日本人に読まれるときには日本語風に訓読されるが、もしかりに中国人がその場に居合わせてそれを朗読したとすれば、そのときこそ、書記面だけでなく音声面でも詩はその本来の姿、正しい漢詩としての姿を現わすからである。

だから、日本漢詩の韻律（音数と平仄）や脚韻は、日本人一般にとっては「潜在的」ではあるが、「本物」の理想的な読者を得たときはじめて、その本来の面目を顕在化するものと見られていたわけである。そして散文の場合でも、事情はそう変わらない。つまり日本人は、現実にはほとんど会うこともない中国人の読者を強く意識しながら、漢文や漢詩を書いていたのである。

もっとも、たとえば唐代の漢詩を現代の中国人が朗誦した場合、たとえ標準的な「普通話」で発音したとしても、唐代長安の平仄や脚韻が「正しく」再現されるわけではない。韓国人が「音読」するときは、もっと原音との隔たりが大きいだろう。だがそれにしても、日本流の漢文訓読では、原テクストの音もリズムもほぼ完全に消え失せることを十分承知していながら、日本の詩人たちが「正規の」漢詩を熱心に作りつづけたというのは、きわめて興味深いことではないだろうか。

しかも残念ながら、そうした日本の漢詩を実際に中国の文人が目にする機会は、近代に至るまで、めったになかった。鎖国の時代（一六三九―一八五三）には、中国の商船が長崎の出島に出入りを許されたのみである。ただ朝鮮からは、室町時代以来の慣例によって、朝鮮国王の外交使節団「朝鮮通信使」がしばしば来日した（一六〇七―一八一一に合計十二回）。日本では、朝鮮における漢学のレベルの高さがよく知られていたので、通信使の行列が通る道筋に住む知識人たちは、争ってかれらに面会を求め、自作の漢詩の添削や批評を乞うたという。

これは譬えていえば、現代の日本人が、英語の韻律や脚韻の規則に合わせて「正しい」英語の詩を作り、それを逐語訳に近い日本語で（日本化した英単語を随所に交じえながら）読むようなものである。だとすれば、日本人にとっての漢詩とはいったい何なのか――音もリ

ズムも本物をめざしながら、自分ではついに本物の効果や味わいを実感することのできない外国語の詩とは、いったい何かという、きわめて重大な問題に突き当たる。

ところが日本の漢詩・漢文研究史では、この根本的な疑問はほとんど問題にされてこなかった。従来の研究や議論で取り上げられたのは、たとえば奈良時代や平安時代、あるいは鎌倉・室町時代、さらには江戸や明治の漢詩について、その詩風やテーマ、用いられた語彙や表現、それらに影響を与えた中国の詩論、あるいはその日本化（いわゆる和臭）などといった点ばかりである。そこには一種の錯覚がある。すなわち、同じような漢字が同じような形で並んでいるからには、中国人にとっても日本人にとっても漢詩は漢詩であり、両者の間に何の違いもないという思い込みである。

だが、漢詩を中国語式に音読せず、日本語風に訓読して書き下された漢詩は、ふつうの日本の詩（たとえば和歌や俳句など）にくらべると、七音や五音といった定型をもたない、ただの「自由詩」にすぎない。訓読のさいには、漢詩の五言や七言のリズム、その内部の二・三や四・三の切れ目、平仄の規則的な配置、脚韻などは、すべて消え失せる。

そしてあとに残るのは、ごつごつした直訳調で、漢語を多く含み、定まった韻律をもたず、訓読上のさまざまな約束や習慣によって古風に様式化された文体をもつ、一種の散文である。ただし、初期の漢文訓読は、直訳調とはいえ、語彙や語法の点ではもっと当時の日常言語に近いものだったようだが、時代が下るにつれて、固定化された訓読のスタイルと、ふつうの日本語文体との差がだんだん大きくなっていった。

ただし、小倉も触れているように、十数世紀の長い歴史を経て、訓読された漢詩も、和歌や俳句にくらべてそれなりに魅力的な、はずむような雄渾なリズムと、硬質できびきびした独特のスタイルを確立している。またそうした漢文訓読のスタイルが、のちの日本語にも大きな影響を及ぼして、「漢文訓読体」「漢文直訳体」という一つの重要な書法を形成するに至った。

だから、訓読された漢詩を日本固有の詩歌と同様に、あるいはそれ以上に愛する読者も多い。だがその朗読を聞くと、中国語で朗読される漢詩とは似ても似つかない日本語の散文詩になっている。それにもかかわらず、これが日本では「漢詩」と呼ばれ、ほぼ漢詩そのものと同一視されているのは、奇異な現象である（漢文の場合もほぼ同じことである）。

六

それでは、なぜこのような錯覚が生じ、一般に定着したのか。なぜ日本では、訓読された漢文がもとの漢文とほぼ同一視され、同じような資格を与えられるようになったのか。

さきに述べたように、日本では、漢文という外国語のテクストを読むための三つの手続きのうち、（1）できるだけ原音どおりに発音するという基本的な過程が、ごく早くから省略されていたらしい。だが実はそれだけではなく、その第三の過程、つまり（3）同時代の日本語に移し変えて理解するという作業もまた、ごく初期の段階で行われなくなった。

つまり意外なことに、日本では近代に至るまで、ふつうの意味での「翻訳」、すなわち外国語のテクストを自国の誰にもわかる日常言語に移し変えたものが、ほとんど残されていない。つまり「漢文訓読」という過程を踏みさえすれば、それ以上の「翻訳」は不必要と考えられていたのである。漢文や漢詩の現代語訳が行われるようになったのは、近代に入ってかなり時間がたってから、つまり漢学の伝統が薄れてからのことである。

たとえそういう試みがあったにしても、それは漢文学習の一時的な方便であり、記録して後世に残すには値しないと考えられたようだ。もっとも、江戸時代は空前の漢学ブームが起きた時代であって、ことに江戸後期には、漢詩をくだけた口語に訳したものがいくつも出版されている（服部南郭（はっとりなんかく）『唐詩選国字解』（寛政三、一七九一）、柏木如亭（かしわぎじょてい）『連珠詩格訳注』（享和元、一八〇一）など）。

ただこれらにしても、たんに漢詩の意味をわかりやすく「噛んで砕いた」だけのもので、いま外国語の詩が翻訳されるときのように、翻訳自体を原詩の芸術的な高みに近づけようとする意図は、まったくなかったと思われる。

というわけで、日本では、漢詩・漢文という外国語のテクストを読むのに、（1）音読もせず、さりとて（3）翻訳もしないという奇妙な習慣が定着していた。それはなぜか。その歴史的背景を考えてみよう。

まず原文音読の習慣が早くから消えたのは、大陸中国と東海の島国日本の間には、直接的な人的交流の機会がきわめて乏しかったからで

ある。ほとんど文字に残らないほどの昔は別にして、ほぼ紀元六〇〇年ごろ（飛鳥時代、推古朝）に始まる外交使節、遣隋使・遣唐使のメンバーとして中国に渡った日本人は、ごく少数である上に、その遣唐使も八九四年（寛平六）には廃止された。

むろん日本に渡来した中国人もけっして多くはなく、一六三三年（寛永一〇）に鎖国令が布かれてからは、さらに交渉が少なくなった。江戸時代、同時代中国の日常言語を曲がりなりにも聞き取り、話すことができたのは、長崎通詞や一部の学者など、ごく少数の人間だけだった。だから漢文を音読しようにも、現地中国での発音自体を知っている者が、ときたま日本にやってくる僧や学者、商人や亡命者以外には、ほとんどいなかったのである。

だが発音はともかく、翻訳のほうはどうだろうか。直接的な交渉が少なければ、漢文から日本語への翻訳は、逆になおさら盛んになりそうなものではないか。

近代に入って以来、今からつい数十年前に至るまで、日本から直接西洋に渡った人間、いわゆる「洋行者」の数は、けっして多いとはいえない。だから、正しい発音で西洋の言語を話せる者も、ごく限られていた。しかし明治以来、あらゆる領域のおびただしい文献が、現代日本語に訳されてきた。外国語がよくできない人の数が多ければ多いほど、翻訳はその価値を増すのが当然だろう。

それでは、なぜ同じことが漢文について行われなかったのか。それは、まさに漢文訓読という便利至極な即席翻訳法、今日の機械翻訳に近いシステムが開発され、数百年の時間をかけて練り上げられてきたからである。漢文訓読の発明は、ある意味では、人的交流の極端な乏しさ—近代以後にくらべて、はるかに渡航者が少ない—を補って余りあるものだったと見ることができる。

だがそれにしても、なぜわかりやすい日本語への「翻訳」でなく、ほぼ直訳に近い、しかも高度に様式化された「漢文訓読」が優先されたのか。この重要な疑問にも、まだこれまで答は出されていない。というよりも、問い自体がほとんど問われていない。私見によれば、その答は、日本では漢文がたんなる外国語テクストという域を越えて、神聖視、聖典視されていたからである。

漢文は先進文明、中心文明としての中国文化の精髄と見なされ、漢字、および漢字で書かれた文には、際立った崇敬の念が払われてきた。むろんその点については韓国でも事情は同じであり、漢文重視の歴史という面では、韓国のほうが日本を圧倒的に上回るだろう。とはいえ韓国の場合は、中国とは地続きであり、好むと好まざるとにかかわらず、直接的な交流はずっと盛んだったに違いないし、漢文を漢文のま

まで発音し、意味を理解することのできる知識人の数もずっと多かっただろう。韓国ならば、仏典を音読しても、その意味を了解することのできる信者ははるかに多いと想像される。

漢文をふつうの自然な日本語に「翻訳」してしまえば、多くの日本語化した漢語は残るにせよ、原文にある多くの文字が消え、もちろん語順、つまり統語構造も消える。ところが漢文訓読によれば、ことに（六）「書き下し」（日本語表記への書き換え）をせず、（五）「訓点を施した漢文テクスト」のままで読めば、原典の字も語順もそっくりそのまま残しながら、しかもおおむね意味のわかる日本語として読むことができる。

漢文訓読が日本の歴史を通じて格別に重視され、学問の中核的位置を占めてきた理由は、ひとえにこの点にある。こうして、訓点つきの漢文、訓読される漢文は、ほぼもとの漢文そのものに接しているという読者の錯覚ないし願望に支えられて、日本では漢文そのものに対するのと同じ敬意を払われ、同じ権威を維持しつづけた。こうした錯覚や願望が、今日でさえ（やはり無意識のうちに）日本人のなかに歴然と生き残っているしるしの一つは、「素読（そどく）」と呼ばれる現象である。といっても、素読という習慣ないし学習方法自体に、何か問題があるというわけではない。それどころか、学問がもっぱら「漢学」を意味していた時代には、知識人の子弟は幼いときに、まず素読から始めるのが常識だった。今でもこれが漢学の道に入る（あるいは、その深みに入り込む）ための最善の方法だと考える人々は少なくないようで、その効用を説くために「読書百遍、義おのづから通ず」（正しくは「義おのづから見（あらわ）る」）という古句が引かれたり、ノーベル賞を受けた湯川秀樹博士の幼時の例が挙げられたりする。

ただ、ほとんど信じがたいことには、『大言海』をも含め、管見に入ったすべての日本語辞書で、素読は「書物、特に漢籍の意味・内容を考えることなく、ただ文字だけを音読すること」（『日本国語大辞典　第二版』）といったたぐいの定義を与えられている。漢籍の読み方を問題にするとき、「音読」という語は特殊な意味をもつのがふつうである。だが、ここでは奇妙なことに、たんに「声に出して読むこと」を指すようで、これはまことに紛らわしい。いったい、「文字」を声に出して「読む」とはどういうことか。発音も語順も原文そのままの（ふつうの意味での）「音読」なのか（日本語訛りは別として）、それとも訓読（つまりは日本語読み）なのか。誰もが当然抱くはずのこの問いには、どの辞書もまったく答えてはくれない。一般に外国語（たとえば英語）の朗読についてならば、誰もがごく自然に、前者だと考

えるだろう。ところが漢文の場合には、答はなぜか「言うまでもなく」後者である。初学者などが「意味も分からず」ただ朗読するという「漢文」とは、実は先に挙げたどの段階にあるにせよ、すでに日本語化の加工を施された（あるいは、即座にそうした加工を行うことが期待される）テクストなのだ。

だから、もし子供の「素読」の場に誰か門外漢が居合わせるとすれば、その人物が耳にするのは、まったく意味不明の中国語（に近いもの）ではなく、たんに意味のよく分からない、そしてかなり不自然な語彙や語法を伴う日本語そのものでしかない。それにもかかわらず、もろもろの辞書をはじめ、素読を推奨する論者たちにしても、素読がテクストをできるだけ原音どおりに読むことなのか、それとも訓読することなのかを区別し、明記することさえしない、というより、その必要に気づいてさえいないらしい。そういう人々は、素読によって、くわしい意味はともかく、音声を通じて、つまり身体を通じて、「原典」そのものにじかに接することができ、やがては原文の真髄にさえ近づくことができると信じているわけだ（ここにはデリダのいう音声中心主義さえ匂うように思われる）。ところがこの「音声」は、どう見ても中国語ではなく日本語のそれである。こうした明らかな混同は、日本人の頭のなかに、訓読文はほとんど原典そのものに近いという錯覚あるいは願望が、知らず知らず、いかに深く刷り込まれてきたかということの動かぬ証拠ではないだろうか。

そして、その訓読を通して日本の文化が中国文化から「直接」受け取った恩恵は、計り知れない。先にも触れたように、訓読の語彙や語法は、日本語そのものにも大きな影響を及ぼした。その影響の範囲は、古代ギリシャ・ラテン語が近代西洋語の語彙や語法に対して及ぼした影響とは、比較にならないほど広く、大きい。

とはいえ、考えてみれば、原文の発音を抜きにし、語順を変え、余計な語を添えたり省略したりする訓読が、やはり原典そのものではないのも事実である。これはないものねだりかもしれないが、訓読は所詮、直接的な人的交流の欠如による理解不足を補いきれないものだったということも、やはり否定できない。そして漢文と訓読との同一視ないし混同は、多くの誤解や思い込みを生んだ。もともと日本語をゆがめてまで原文に付き従おうとした訓読の文体は、不自然でもあり、不正確でもある。

というわけで、漢文訓読は、簡潔を旨としながら、日本語としてはやや無理のある直訳体を用いたため、結果として少なからぬ誤解を生じてきた。ことに一般に漢文の知識が激減した今日、その残骸に出くわすことがよくある。例えば「既而」（スデニシテ）は、「それからあ

と、そういうことがあったのち」の意だが、これを「既に」の知的言い換えだと信じて、文章のなかで使う者が少なくない。「須」（スベカラク）は「…することが必要だ」の意だが、これを「すべて」の文語だと思い込んでいる筆者も多い。もともと日本語では、「すでにして」も「すべからく」（「…せねばならないことだが」の意）も、きわめて不自然な語法である。

「喜・説・悦・歓・懽・驩・欣・忻・懌・怡」は、漢文ではそれぞれ別の字（おおむね音や四声を異にする）で、別々の意味を担っている。だが訓読ではどれも等しく「ヨロコ（ぶ）」と読まれるために、同じ意味に受け取られる危険が大きい。それでも近代以前には、伊藤東涯の『操觚字訣』のように、漢字の意味や用法の違いを教える本がひろく読まれていた。そこにはたとえば、「喜ハ、楽也、…ウレシガルナリ、ヨキ事ヲ見聞テ、心ニヨロコビ、キゲンノヨキコト也」、また「説ハ、…ワガ心ノ内ニ、大慶満足シテ、ウレシク思ル事也」（伊藤）といった説明がある。

漢文を学ぶ者は、それらの漢語の「正しい」発音はできなくても（日本語風に「音読」することは、やろうとすればできた）、その意味や用法をまるごと覚え込んだのである。そのさいの苦労は並大抵ではなかっただろうが、それにしても、いったん「ヨロコ（ぶ）」と日本語で読んでしまえば、もとの漢語との語義のずれを直感的に十分意識することは困難だったに違いない。

現代でも、日本語のひとつの語に多くの異なった漢字を「正しく」当てることが要請されている。そのための教科書や辞典もたくさん出ているが、同じ「きわめる」という日本語に、漢字の「窮」を当てるか「究」を当てるか、それとも「極」を当てるべきかに悩むというのは、日本語という一つの独立した言語という立場から見れば、きわめて妙なことである。というのはこの場合、もっとも適切な漢字を選び出すための基準が、日本語の「きわめる」の意味だけではなく、漢文という中国の書記言語で「窮」「究」「極」がどう使い分けられるかという点を考慮する必要があるからである。日本語の表記は、いまだに完全には中国語から自立することができず、部分的には中国語の権威に依存せざるを得ないと言ってよい。

そもそも中国の古い文語のテクストを、きわめて人工的で不自由な日本の書記言語に移すことは、どちらも本当の実感をもって理解することができないという点で、やや誇張して言えば、ある言語による発話のシニフィアン（記号表現）を、たんに別の言語のシニフィアンに移し変えるだけで、肝心のシニフィエ（記号内容）を素通りしてしまうことに近いとも言える。

むろんソシュールによれば、シニフィアンとシニフィエは一枚の紙の裏表のような関係にあり、シニフィエ抜きのシニフィアンはありえないが、二つの確立された言語の間を行き来する翻訳という特殊な作業では、シニフィアンの上滑りという現象は、十分にありうるのではないか。

七

こうして「訓読された漢文」は、つねに理解の上すべりや誤解の危険をはらみながら、中心文明の権威をもって、長く日本文化の中心的な位置を占めてきた。むろん漢学を学ぶ者たちは、辞書や用字辞典の助けを借り、膨大な読書の経験を積んで、あくまで原文の真意に迫ろうとする努力を続けてきたし、めざましい成果を挙げてもきた。だが、詩でも散文でも、音やリズムをないがしろにした読解によって、どこまで原文に肉薄できるだろうか。そこにはおのずから、乗り越えがたい限界があったに違いない。

その結果、一部には、尊い聖典としての漢文を訓読しさえすれば、何となくわかったような気になるという習慣、さらには、完全にはわからないものこそ高級で有難いと感じる傾向が生じた。この傾向は、よくわからないものの権威を振りかざし、難解なものにこそ権威を認めるという事大主義的な態度に通じる。

そうした悪弊は、今日もなおその痕跡をとどめているように見える。漢文に代わって英語やフランス語など、よくわからない西洋の言語が幅を利かせている。官公庁やビジネス関係の文書、テレビや新聞などには、一知半解の外来語が氾濫している。若者のモードや歌や店名などには、片言の（しばしば見当外れの）外国語があふれている。ただ幸いにも、きわめて難解な学者や作家や詩人を有難がる風潮は、以前よりも下火になったかもしれない。

もっともある意味で、「ゆらぎ」は強みでもある。つねに大急ぎでただ一つの解釈、ただ一つの解答だけを求めようとはしない態度―さまざまな読みや解釈の可能性を視野に収めながら、余裕をもって宙ぶらりの状態にいられることは、性急な独断や自己の過信による衝突や対立の絶えない今日では、一つの知恵であり力であるかもしれない。確固たる足場をもたないゆえのぐらつきや不決断は、一方で、寛容、

柔軟性、抱擁力といった美徳につながるとも言えるだろう。

日本文化に最大の恩恵をもたらすとともに、数々の無視し得ない波及効果をも生み出した、漢文訓読という制度について、すでに過去の遺物として見過ごすのではなく、もう一度根本的に見直してみることが、大いに必要ではないだろうか。

注

（1）小論は二〇〇六年三月四日、京都の国際日本文化研究センターで開かれた日文研共同研究「前近代における東アジア三国の文化交流と表象」第四回共同研究会での発表原稿に、大幅な加筆修正を施したものである。

（2）漢民族自身は、これをたんに「文」と呼んだ。

参照文献

伊藤東涯著、重野安繹閲、村山徳淳校訂　一九〇六『操觚字訣　附補遺』再版、須原屋。
小倉芳彦　一九七四『古代中国を読む』、岩波書店。
柏谷嘉弘　一九八七『日本漢語の系譜―その摂取と表現』、東宛社。
古田島洋介　一九九七「漢文訓読の〈割引率〉―記憶術としての定位」、『明星大学研究紀要　日本文化学部・言語文化学科』第五号、五五―六八ページ。
築島裕　一九八四「訓読」、『国史大辞典』、吉川弘文館。
月本洋　二〇〇八『日本人の脳に主語はいらない』、講談社。